



Title	文豪頼山陽の賢母静子梅颯夫人の實家篠田家の墓
Author(s)	羽倉, 敬尚
Citation	懐徳. 1977, 47, p. 16-28
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/90551">https://hdl.handle.net/11094/90551</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 文豪 頼山陽の賢母静子梅シ夫人の實家篠田家の墓

羽 倉 敬 尚

冒頭先づ右の命題に直結し、大阪市天王寺區八丁目中寺町、浄土宗龍淵寺域内の篠田家墓、併せてこの家に、ユカリある廣島縣竹原市産の頼家一門の書跡の寫眞をのせる。



頼山陽外祖父篠田氏飯岡姓名孝欽號義齋  
又澹寧字德安寛政元年一月八日卒年七十三  
十三  
(義齋墓の右側背) 追刻二行

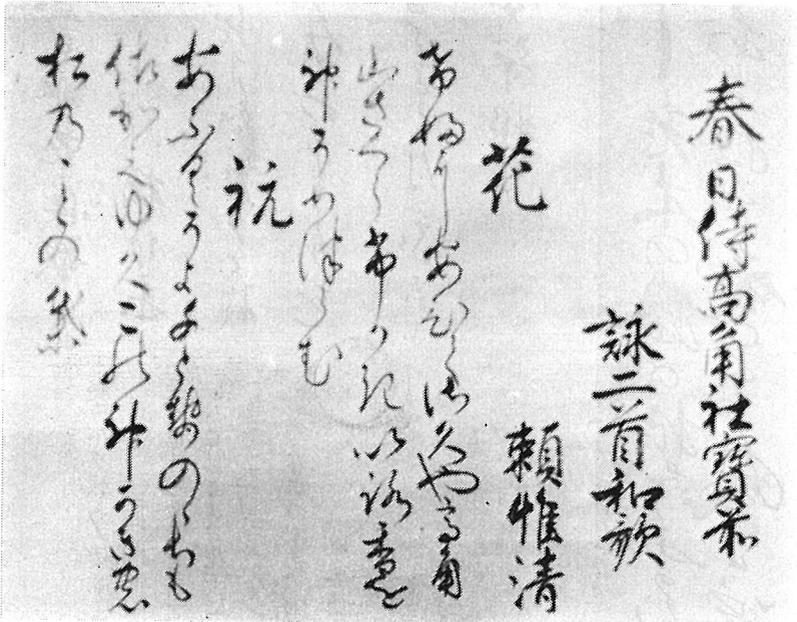
篠田氏又、飯岡姓を以ても稱せられ、元禄頃(元年は一六八八)から天保度まで約二百年間、大阪に住んだ儒醫の家である。

(右墓地寫眞、池田市佐瀬良幸氏提供)



義齋飯岡先生  
 慈室磯野氏  
 (滄浪ノ妻)  
 存齋飯岡先生  
 滄浪  
 〃

文豪頼山陽の賢母静子梅シ夫人の実家篠田家の墓



廣島竹原頼春風館藏 (讀鮮次頁)

春日高角社ノ寶前ニ侍リ二首ノ和歌ヲ詠ム  
頼 惟清

(號享翁、天明三没、七十七歳)  
花

今日にあひて咲くや高角」山櫻、深き色  
香を」神ぞめづらむ

祝

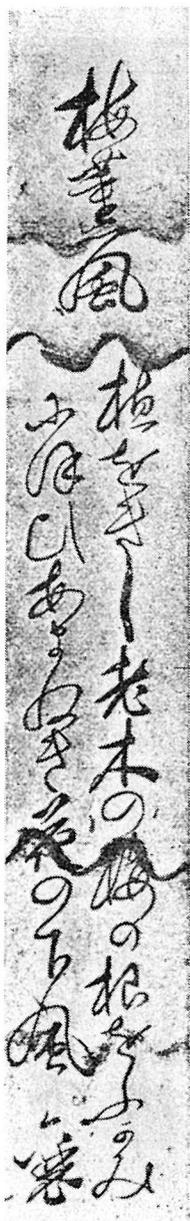
仰ぐぞよ千年の後も一榮え行く、この神  
垣の」松のことの葉

惟清の妻は竹原人、道工氏仲子、男  
は惟完(春水)、惟柔(杏坪)、惟  
清は業間上京して平安和歌四天王の  
筆頭名歌人小澤芦庵(名玄沖)に學  
ぶ。仲子の墓文は大阪の中井竹山撰

頼 襄(のぼる)

梅方風ニ薫ル

植をきし老木の梅の根を深み、匂ひあまねき花の下風、襄(道工氏藏)



春日詠花倭歌

橘惟柔

春日花ヲ詠ムノ倭歌

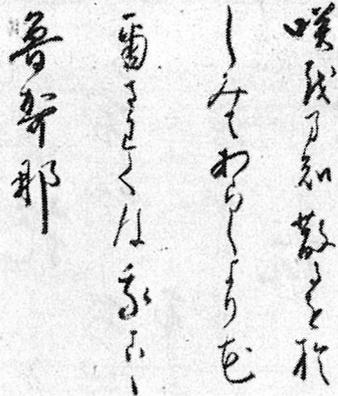
橘(姓)惟柔(杏坪)

咲くを待ち散るをお」

しみて嵐より、花」にさわ

ぐは我こゝ」ろかな

春水の末弟、山陽の叔父



山陽の和歌は一見珍に属する様であるが、彼は、壯年、母梅颯夫人につれられ小澤芦庵を訪うており、芦庵死後、文政七年五月十八日、東山鹿ガ谷靈鑑尼寺門跡家士で芦門瀧原豊常（號宋閑）邸にて、同じく芦門の、羽倉信美、蘭醫小石元瑞夫妻等十二三名の歌筵に列し、同年七月十九日には山陽の外豊常夫妻、父子、香川景樹らを交えた歌會にも参加出詠しておる。

頼 静子（梅シ）春水ノ妻、篠田氏女、山陽の母芦庵門人

美形細香の女、山陽と婚約あったが父の言により成らず書畫に入り嫁がず文久元、七十五歳にて終る）伊豫の何がしと共に砂川（京勤の幕臣か）に往あそびて、打ちよれば同じ心の友千鳥、千里の浪を立ちへだてゝも 梅颯

大阪府岸和田佐佐木氏藏（同氏著「心の故里」より）

美濃の細香（醫、江馬蘭齋の女、山陽と婚約あったが父の言により成らず書畫に入り嫁がず文久元、七十五歳にて終る）伊豫の何がしと共に砂川（京勤の幕臣か）に往あそびて、打ちよれば同じ心の友千鳥、千里の浪を立ちへだてゝも 梅颯

義齋の次女、直子（静子妹）、尾藤二洲妻、文名梅月

雪中ノ鶯 花としも欺かれてや鶯のつもれる雪の枝に鳴くらむ 梅月（大阪府岸和田佐々木氏「心の故里」）

雪中ノ鶯

花としも欺かれてや鶯のつもれる雪の枝に鳴くらむ 梅月（大阪府岸和田佐々木氏「心の故里」）

文豪頼山陽の賢母静子梅シ夫人の実家篠田家の墓

此の人の短冊は全く珍らしく、女人とは思えぬ稽古した儒者らしいよい字である。雪が美しく降り積った爲、鶯は梅の花が咲いたかと思つて、ホーホケキョと鳴いたわいと、の技巧豊かな上手な歌である。



竹原人道工彦文（道工氏藏）

春ノ雪ガ風ニ散ル  
花ならで中々強し」  
さらぬだに、積りも  
あへぬ」雪の春風

（有賀長伯高弟）

終戦後、阪神各地に假寓の間、幸い阪大懷徳堂記念會、京阪二地の大學圖書館、奈良天理圖書館その他有志諸家の贊同、恩借を得、朝日新聞の後援のもとに昭和三十年九月二十七日から十月二日まで一週間、大阪市の玄關口、驛前、阪急百貨店六階催し物陳列場の提供を受け「大阪學問所、懷徳堂回顧展觀會」を催行した處、初日に故逸翁、小林一三翁の光來を煩わし、豫期しない庇援にあずかり、相當の成績をおさめ面目を得たのであった。この催しは約半期前に、某同好者と協同し、阪急側の豫約承諾を得、徐々準備したのであったが、約三ヶ月後に、同好者は病に癒れ、私は折角の豫約の手前、中止もならず、殆んど徒手空拳、二三遠方の借り出しにも足勞を敢えてした始末であつた。唯開催中、當時、京都華頂學園教授、山本四郎さんが二三日寸暇を劈いて臨場して下さい

のは有難かった。

この展観に先だち、偶然、廣島、竹原の舊家の道工氏後裔で大阪住の法曹人だが、出生が關係先賢の事蹟にも關心深い隆三さんの知を得て、同氏の先代、助右衛門景房の女、仲女が頼惟清に嫁し、この女性没後には、懷徳堂師儒、中井竹山が墓に銘文を承けておるのを知って、それらをも展観に加えたのであった。

次いで世下るが、本命題の大阪儒醫、篠田義齋の弟で嗣子の滄浪の女、幀（訓ハルカ）女は、竹山の季子、曾縮號、碩果また石窩に嫁しておる。この結縁は恐らく前掲寫眞の、義齋の女子、靜子、直子の姉妹が、竹山の世話媒酌にて、姉は竹原の頼惟清に、妹は尾藤二洲に嫁した後縁を受けたのであることは想像される。

この姉靜子は頼惟清の男、惟完（春水）に嫁いで文豪、山陽（本名、襄）を生み、後世、賢妻良母の典型的な女性、梅颯夫人として芳名を残したが、この賢夫人が八十四歳の長壽を生きぬいた事を特に強調特筆する。即ちこの賢母は男子、山陽が天保三年、五十三歳、老に至らず没した後、十二年の後迄、永え同十四年、八十四歳で終り、その間、日記をも残し傳えておる。大阪の儒醫家飯岡姓、篠田氏の名は、殆んどこの健體長壽の婦人靜子によって後世に傳えたとするも過言でなからう。

私は去る昭和三十二年、關西醫史學會關西支部、經營の雜誌醫譚に、大阪の儒醫、篠田家の題で、この篠田家の墓地を中心に一文を寄稿した。

この拙文をまとめ得たのは、後にも述べるが、義齋の墓文が（實は墓は建たなかつたとも見られる）浪華双書第十卷に収まり傳はつたのと、この寺即ち龍淵寺が戦火を召れ、古い過去帳を傳えておつたからである。その後、今に至って既に約二十年、その間、幸いに拙文を見て、注意を寄せられた特志者もあり、又自らも氣づいた事もあり、ここに前稿を補正して、同じく阪地の學問雜誌に傳える、ムロン大半は前稿の再記であり、要するに一部の補正に止まるのである。なお、篠田氏過去帳中、義齋以前の法名に「天滿シノ田」の住所の注記があり、それが、義齋の女、

静子の頼家入嫁の頃には、立賣堀堀裏町に轉じておる。

山陽が生れたのは、安永九年十二月九日、肥後橋の南の江戸堀北壹丁目、今の金光教玉水教會の向い、同教社會事業團の構内で、現在「此附近頼山陽生誕地」の石標が建つておる。ここが當時の春水の寓居で、當年、父春水は卅五歳、母静子は廿一歳であった。義齋は此時産衣に添えて、外孫山陽の誕生を祝つて

久方のあめの恵みにならへよと色に祝ひて贈るうぶ着は

の歌を贈つた。寡聞管見、未だ私は義齋の書蹟、作文等に觸目しない、先年、竹原及び東京頼家にも問うたが傳えないとの事であった。この一首和歌は蓋し珍什である。

この翌年、春水は淺野氏に召され、任に廣島に赴いたので、二歳の山陽は母に連れられ、一旦、竹原に歸郷し、その明るる年、廣島の父春水の許に移つた。父は其の後、藩主が江戸に下れば従い、その間留守で、山陽は母の手一つで育てられた場合が多く、又一旦は大阪を引上げたが、幼時、屢々來阪して居り、その都度、篠田家に滞留したことがあつた。篠崎小竹は、この少年時の謂わば竹馬の友である。外祖父義齋が死んだ寛政元年には山陽十歳であつた。こんな風で、山陽は大阪に生れただけでなく、隨分大阪には縁が深く、殊に多く母に育てられたことを思うと、山陽が大阪の舊家篠田家に傳わる庭訓を、多分に享受した事は想像し得る。

篠田家系は未だこれを發見し得ない。それは後述の通り、既に後裔死絶し、その家記所傳の行方が知られないからである。幸いに義齋の女婿春水が撰した義齋の碑文があり、これに依つて梗概が知られる。この碑文は長いもので、菩提寺墓域の現状等より見て、若し建てられたものであつたら相當の大きさのものであろうが、失われたらしい形迹もなく、恐らく建碑せられず了つたものの様に思われる。文は浪華叢書第十卷、大阪訪碑録中に「飯岡義齋先生墓碑銘」として收められてある。これが後世に傳えられたのは、篠田先靈にとつて大きな福音である。今、この文と前記、過去帳の戒名とに依つて、先づ篠田家系を考覈する。

篠田氏は近江源氏の族、佐佐木六角大膳大夫高頼の孫と傳うる（傳うると言うのは佐佐木系譜には偽傳偽作があるからである）中納言義實に出で、義實の子の義政初めて飯岡（いのおか）氏を稱え、義政の曾孫、周徳、初めて大坂に來つて儒醫を業とした。この周徳が義齋の曾祖父である。周徳の享年年代は恐らく元祿前の頃と思われる。墓石は現存せず過去帳にも周徳の名は見ないが恐らく

元祿八、二、十一。松室淨讚信士。篠田市右衛門事

同十一、七、一。經譽壽閑居士。シノ田庄兵衛父

の二人の何れかが、周徳その人であろうかと思う。

周徳の子は忠益で、これも墓石は無いが、過去帳に次の通り出ておる。

享保九、五、廿。清譽淨碩信士 篠田忠益

忠益の子即ち、義齋の父は忠嘉、これも墓石無く、且つこの人は過去帳にもそれと思われるのは出ておらぬが、過去帳にある係累即ち妻、子、女の次の記載年次から見て閑徳と稱したらしい。即ち

享保十四、十一、廿七。理屋智圓信女 篠田閑徳妻

正徳四、十、廿七。靜洞院壽譽久法居士 閑徳妻父

は忠嘉の妻及び妻の父であろうかと思われる。若し私の考證の通りであれば、この妻の父は南氏某で、妻はその娘で、この女性が義齋の母である筈である。

忠嘉の子、義齋に就いては、勿論、碑が義齋その人のものであるから、随分に詳しく書かれてある。即ち義齋に至つては醫を廢して、儒のみで門人に授け、そして本來の姓は源氏であるが、元の飯岡氏を姓の如くして用い、飯岡義齋とも言つておる。現に墓表にはソウ書かれておる。名は孝欽、字は徳安（又、徳庵）號は義齋の外澹寧とも言つた。義齋の母は南氏とある。而して義齋、十餘歳で兩親に別れたと記されてある。義齋の歿年寛政元年から逆算すると

生年は享保二年に當る。だから十餘歳は享保末年頃迄となる。叙上、閑徳妻の享保十四年は正にこの條件にあてはまる。だから私は閑徳を忠嘉と同人と言つたのである。然るに其の頃に忠嘉の歿年が過去帳に見えないのが不審である。義齋十餘歳にして兩親、即ち父忠嘉にも別れたとするは、或いは碑文撰者の春水の聞き誤りで、父はモウ少し長命であつたのかとも思われる。又、此寺の古過去帳と言ふのは、その少し後の寛延頃に、能筆細字を能くした住持（或いは備筆？）に依つて、當時傳えられた、年次別の古い過去帳から整理網羅寫されてある。その時、若しや脱漏した様な事も考えられぬでもない。

要するに義齋は兩親の縁には薄く、若くして家を嗣ぎ、幼弟（後出の滄浪）を育て艱難苦勞し、廿歳の時、鈴木貞齋に就いて學び、貞齋は義齋の厚い志に感じ、教導懇切であつた。貞齋死後、石田梅巖に心學を受け、又苦學し、遂に篤疾に罹つたが、其の病中、大悟する所あり、以後は石田の社中、推して宿徳と爲し、皆弟子の禮を執つた。偶々論語の郷黨編を讀んで感ずるところあり、從來の學を捨て、朱子學を專攻し、遂に大成し、多くの門人を延き、その教うるや課程を作り、克く易より難に導くと云つた風で、訓化するところ大であつた。又家を治むること嚴正で、甚だ貧しかつたが、困窮を救濟すると言う風で、近隣から愛敬を受け化服した。貧に在つても樂みを改めず、文雅の交游廣く、中井竹山、履軒の兄弟を初め、片山北海の混沌社中にもあり、木村葉叟堂日記にも篠田徳安の名が見られる。義齋は寛政元年十一月八日、年七十三で終り、上述の龍淵寺に葬つた。安徳院とおくり名した。外孫、頼山陽時に年十歳。門人は多かつたが、惜しくも名傳わらず、石州津和野藩儒、山口純實（號、剛齋）は其の一人である。初妻、淺川氏、柳女、三子を生んだが皆夭し、後妻、來島氏、柔女、三女を生み、長女は夭し、二、三女が上述の頼と尾藤に嫁した。即ち男子が無かつたから、弟、滄浪が後を承けたのである。

義齋の初妻淺川氏、名はお柳、號を蘭室と言ひ、寶曆七年四月九日、卅六歳で夫に先んじた。墓は龍淵寺に無く、夕陽ヶ丘、淨春寺に在つて、門人山口純實撰の碑文がある。其の文に依ると、自分の生んだ三女子が皆夭死し、自分

も病身であったから、嗣の絶えることを心配して、婢を妾にしてくれと、夫の義齋に請うたが許されなかつたので、絶食して苦諫し、遂に容れられた。而るに其の妾も無く死んだので、お柳は悲哀し遂に病を得、再び起たざるを知って、撰者純實に、後妻、來島氏の事を遺囑して世を去った旨を碑文に書いておる。庭訓正しい醇儒の家では一種の悲劇的挿話と言えよう。この後來島氏お柔は上述の通り、その所生の二女が育つた。お柔は實に文豪山陽の外祖母に當る。お柔は、天明四年七月廿一日に終つた。戒名、溫室妙惠信女。年齢は過去帳にも記述なく、何書にも出ておらず、頼家にも問うたが分らぬ。夫義齋には先んじたが、先づ夫の年齢から推して五十歳以上位には至つた様である。此後妻來島氏の墓石は、モト龍淵寺に無かつた様である。ソシテ義齋の墓石には側、背イヅコにも義齋の歿年月日等の刻字無くして、このお柳の歿年月日のみが、表には義齋墓の表示しか無くて、背面に刻されておる。大方、義齋はお柳の墓側に葬つて、墓表には義齋のみの表示に止めたものであらう。(お柳が先死ゆえ)要するに、來島氏お柔は、命日のみが、夫義齋墓の背面にあるばかりで、名の表示は無かつた。そこで、上述の通り、この來島氏お柳が山陽の外祖母であるからと言うので、大正九年一月、大阪府立市岡高等女學校、六の花會の發企で、新しい一碼が建てられた。實に美わしい事である。その碼には肩書に「山陽先生祖母」の表示が明記されてある。穴拾いであるが正しくは外祖母である。

義齋の弟で嗣となつた滄浪、名は孝鍾、通稱剛藏、字は徳安(義齋の字を襲名)號が滄浪で、この人は又醫を兼ねた。碑文なく礦誌も傳わらず、行實は知られぬが、二女あり、姉は赤松(越智氏)翼、名、文平、號鴻洲(又、高洲)に、妹幀女は中井竹山の男、懷徳書院教授の中井碩果(名、曾縮)に媛ぎ、幀女は七十九歳の長命で、安政六年終つておる。幀女は山陽の母靜子の従妹であり、靜子が山陽を伴つて來阪中は相往來し、時には、親子共、その家、即ち書院内の中井方に止宿しておる。梅シ夫人の日記にも往復の記事がある。滄浪は、寛政八年六月十六日、六十七歳で終り、義純のおくり名を傳えておる。

滄浪には男子、存齋と言うがあつた様である。墓石「存齋先生」と其の歿年、文化十一年七月十五日（戒名、巖淨麗雲居士）に依つて、或いは養子かも知れぬが、滄浪のあとを嗣いだ人であることが知られる。但しその年齢が知られない。中野操醫伯珍藏の「大阪醫家番附」（刊年次の記載はないが内容から文化の始め頃と推定される）に、東方、行司、五名中、第二人目に篠田簡徳と出ておる。恐らく存齋で、又簡徳名（祖父忠嘉）を襲名したのである。

以上の滄浪の子女の母、即ち滄浪の妻は、慈室磯野氏として墓石がある。文化二年十月四日死、戒名、潤屋恵幸信女である。この磯野氏の生むところの二女が、前記赤松翼（越智文乎）、中井碩果の二人に嫁ぎ、又推定される男子は存齋であらう。

現在、龍淵寺にある篠田家の墓石は、以上の義齋、滄浪、滄浪妻磯野氏、存齋、及び後年建立の義齋後妻來島氏と、所を異にする夕日ヶ丘、淨春寺に義齋前妻淺川氏と、結局篠田家墓石の今に傳うるもの六基である。勿論、過去帳には、叙上、戒名を擧げた外、壯年に至らず終つた幼少の子女等の外例えば閑徳一類、篠田良意内、閑徳家來等の名が見えるが、その誰れなるかを知る由がない。

即ち篠田家墓石は存齋以後見當らぬが、文化十一年の存齋の歿後の天保四年の懷徳堂義金人名中に、篠田重五郎の名が見られる。これは前掲、滄浪の女幘子が、懷徳堂教授中井碩果に嫁いだ縁で、親族として、若干、出資したことを示すものであらう。

而して碩果の女婿で、その死後、懷徳書院教授として、明治二年慶校迄、教授の業を承繼した並河華翁（初號、寒泉、明治後戸籍名）の日記「居諸錄」に依ると、天保七年十二月廿八日、篠田亞父死歿の記事があり、又、碩果妻の姪（甥）であると附記がある。これを龍淵寺の過去帳で索むると、同日、

良學恭齋信士、篠田重治郎、廿三歳。

と出ておる。更に天保十二年の中井家親族書に、當時、篠田家は、剛藏ノ倅重五郎、先年、死去死絶と書かれてある。

これらに就いて、彼此勘考すると、過去帳の重治郎は恐らく重五郎の書き誤りで、これが生前、恭齋と號したらしく、又、天保七年、廿三歳死の重五郎は、年代上、寛政八年死の滄浪の子ではあり得なく、且つ居諸録に幀女の甥とあるから、その父は、幀女の兄弟に當る筈で、ここに重五郎の父を、文化十一年死の存齋その人となし、且つ此存齋が、年齢不明なるも、滄浪剛藏の子であり、父の通稱剛藏を襲名したと思われ、即ち、存齋は、滄浪の女、幀女の兄か弟かに當ることとなる。結局、篠田家は、當主、重五郎恭齋が、天保七年廿三歳死歿に依って死絶したのである。戒名、良學恭齋居士。唯この家から出た、中井碩果の妻、幀女が、安政六年迄長命し、篠田家の祭祀もこの幀女に依って僅かに繼がれた。要するに名門の篠田家の血統は男系絶え、中井碩果妻幀子、即ちこの女性の生むところの長女、大阪哥島醫小笠原孝治妻、箴（オサ）女、四女が上出の並河華翁妻歌女（子は早世）七女が、備後福山の儒醫でのち大阪住笹脇正元妻梅野、（男正彦）、八女のしんが京儒醫並河尙教（華翁の本家）に嫁し、外に頼と尾藤に、これも女系を以て傳えておるのである。

以上の通、飯岡篠田家は明らかに、今から百二三十年前、既に子孫断絶し、墓も無縁となった。唯その間、大正九年、市岡高女の篤志に依り、山陽が外孫の縁で、外祖母來島氏墓の一基が重建せられたのである。マコトに奇特事である。

篠田家菩提所の龍淵寺は、幸い全寺宇が戦災を免れた。近年、寺域の東方一部が道路編入の爲め、墓地の整理を豫儀なくせられ、それを機會に、現住鶴見師の厚意で、篠田家墓碑は、義齋、滄浪以下の數基が、今、淨域に、整頓重建せられておる。前年の市岡高女の篤志と言ひ、又この厚遇と言ひ、兒孫なき篠田家の先靈達も無かし地下に瞑しておることと思う。

## 追記

前文、義齋の妻、來島氏柔子の墓石が頼山陽の祖母（梅シ夫人の母）であるの故を以て、大正年間、大阪市岡高女

の有志に依つて新たに墓石が建てられ（それ迄墓石が無かった）、祖母なることも表示せられたるに、義齋の墓石に山陽の外祖父と言う表彰が無いことを記した。何とか刻文を補足したいものと思つたが、篠田家に最も縁の深かつた懷徳堂中井家（木菟麿、昭和十九死、八十九歳、妹、終子嗣ぎ昭和卅死、七十九歳）は、兄妹が明治廿年頃、カトリック教に入つて信教の上から娶らず嫁がずして血統を絶ち（養子東京に在り）中井に續く京儒並河家は當主なお修學の身で、血統を引く者には相談相手もないので、ある機會に、中井もと大阪市長光次氏に一部始終を語つた處、氏は個人として快くその資を助けられ、義齋の墓の側背にも追刻するを得、併せて過去帳に依つて義齋の弟、滄浪にも歿年齢六十七歳を補刻し、更に寺側の意見を汲んで、義齋夫妻、滄浪夫妻と、昭穆の序列を正すことが出來た。

中井市長の家は、懷徳堂の中井とは、偶然同姓ではあるが何ら縁は無く、伊豆三島の古い儒醫の家、杉原姓で、五畿内志の著者、並河誠所が晩年、三島に卜居の際、市長の先、知徳（號孝庵、寶曆十三死、五十七歳）は土地の同學として誠所を支援し業を受け（その前、知徳は五畿内誌の校者ともなつておる）爾後、誠所（三島にて死）——京儒醫、並河説齋（名、尙友）——同任齋（名、尙美）の三代に亘り、中井家も知徳——知信（愿庵、天明六死、五十四歳）——知備（恒庵、文政四死、杉田玄白と交游あり）と三世に亘り、世々上京、並河醫學塾に遊學し、在塾中、同遊の弟二名の客死者もあり（墓は京清水の奥、清閑寺に現存）且つ、中井市長の家が、篠田家と同じ儒醫の舊家の縁で、これが賛同を得たのである。